主体的に社会とかかわり、望む未来を創造する力
－変化の激しい時代を生きる子供たちに－

金沢市立高岡中学校　教諭　　藤　井　宜　子

はじめに

今の子供たちは「未来」にどのような印象を持っているだろう。日本財団が2019年に行った調査では、自分の国の将来について「良くなる」と答えた日本の若者はわずか9.6%だった。確かに日本は生産年齢人口の減少や地方の衰退等の課題を抱え、地球規模の気候危機による災害も予想される。現状から考える我が国の未来は今よりも厳しい。

これでは未来に希望を持てないのも仕方がない、と諦めるわけにはいかない。ここで注目したいのは、同調査の「自分で国や社会を変えられると思う」という項目である。そう思う若者は調査対象の９ヶ国中で最下位の18.3%だった。教育に携わる大人にできるのは、未来を自分の力で「良くする」ことができると思う子供を育てることではないか。

社会を良くするには、何をすればよいか。日本人は、社会を変えるのは国や役所の仕事だと考えている人が多い。しかし前述の通り日本社会には課題が山積し、また急激に変化する時代においては、課題と解決法のどちらもあっという間に古びていく。４年に一度投票するだけでは間に合わない。生活の中で感じた課題を政治家に委ねるのではなく、一人ひとりの市民が社会をつくる当事者として問題を分かち合い、協力して解決していくような、個人の意識と社会の仕組み双方の変化が必要である。

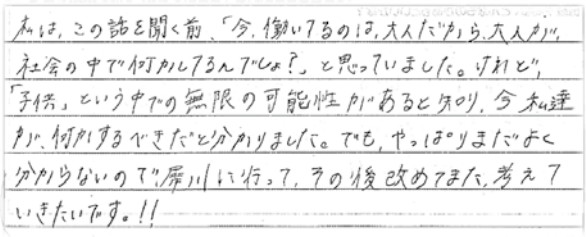
日本に限らず、また社会だけでなく経済や環境も含めて、次の世代が新しい可能性を発揮できる世界を実現するための地球規模の目標がSDGsである。現状の先にある未来ではなく、自分たちが望む未来に向けて必要な行動を逆算し、協働で取り組むというSDGsの考え方と動き方は、予測不可能な世界を生きる子供たちの生きる力に直結する。

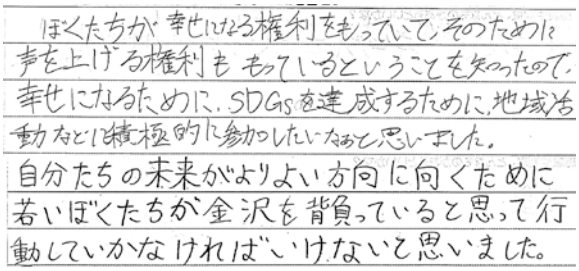
本校では「主体的に社会とかかわり、望む未来を創造する子供」の育成を目指し、総合的な学習の中でSDGsに取り組んでいる。今年度の１年生は、社会について「自分ごとにする」「知る」「課題を解決する」活動を段階的に行い、年度末に「自分自身の望ましい未来を描くことができる」状態を目指した。

４月　SDGsを「自分ごと」に（ゲスト　金沢市企画調整課）

まず、金沢市企画調整課の方からSDGsの考え方を学んだ。SDGsが掲載された文書の正式名称は「Transforming Our World（我々の世界を変革する）」であり、これは世界を今の形からがらりと変えてしまうことを意味する。それほど大きな「変革」を成し遂げるにはこの世界に暮らす全員が取り組む必要があり、中でも子供は「変化のための重要な主体」である。日本の子供は幸福感が低いと言われているが、私たちには幸せになる権利があり、もし日本が幸せになれない国であるなら、声を上げる権利がある。

振り返りには「社会を動かすのは大人だけではなく、私たちにこそ、無限の可能性があることがわかった」「自分たちの未来をよりよいものにするために、行動したい」といった記述が見られ、SDGsは自分たちの未来のために、自分たちで取り組むものであるという意識を持ち始めていた。

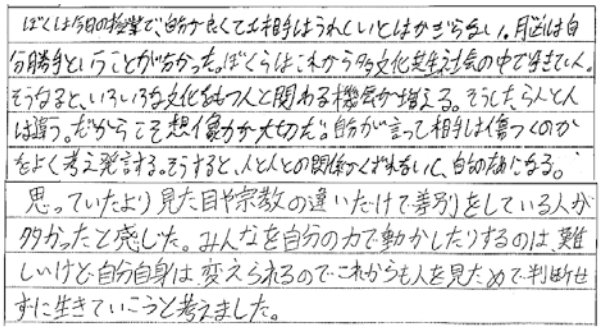

私は、この話を聞く前、「今、働いているのは、大人だから、大人が、社会の中で何かしてるんでしょ？」と思っていました。けれど、「子供」という中での無限の可能性があると知り、今私達が、何かするべきだと分かりました。でも、やっぱりまだよく分からないので、屋川に行って、その後改めてまた、考えていきたいです。!!

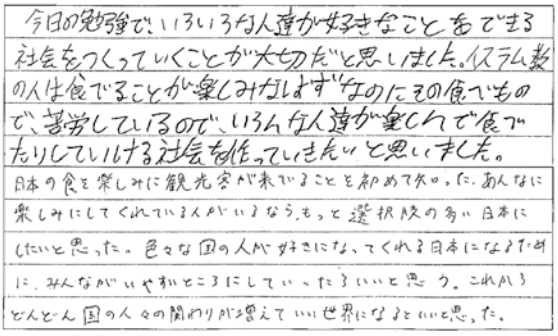

ぼくたちが幸せになる権利をもっていて、そのために声を上げる権利ももっているということを知ったので、幸せになるために、SDGsを達成するために、地域活動などに積極的に参加したいなあと思いました。
自分たちの未来がよりよい方向に向くために若いぼくたちが金沢を背負っていると思って行動していかなければいけないと思いました。

５～７月　社会における課題を知り、関心を持つ（ゲスト　松中権氏他）

５月からは、今ある課題を知り社会に関心を寄せることをねらいとして学習を進めた。テーマを「多様性」としたのは、SDGsゴールのひとつである「パートナーシップ」の基盤として、他者の存在に目を向け想像力を働かせることが欠かせないためである。知識やデータだけでなく、当事者の思いやストーリーを大切にすることを心がけ、毎回オンラインでゲストと対話した。

「多様性」は複数の小学校から集まり、中学校という小さな社会で日常を過ごす中学１年生にとって、身近で切実なテーマでもある。生徒は日々の生活体験を結びつけて考え、自身の行動を変えようとする意欲が見られた一方で、社会（世界）に関しては「…になればいい」などの願いを持つにとどまり、自分が変えていくという意欲までは見られなかった。


ぼくは今日の授業で、自分と違くても相手はうれしいとはかぎらない。自分は自分勝手ということが分かった。ぼくらはこれから多文化共生社会の中で生きていく。そうなると、いろいろな文化をもつ人と関わる機会が増える。そうしたら人と人は違う。だからこそ想像力が大切だ。自分が言って相手は傷つくのかをよく考え発言する。そうすると、人と人との関係がくずれないし、自分のためになる。
思っていたより見た目や宗教の違いだけで差別をしている人が多かったと感じた。みんなを自分の力で動かしたりするのは、難しいけど自分自身は変えられるのでこれからも人を見た目で判断せずに生きていこうと考えました。


今日の勉強で、いろいろな人達が好きなことをできる社会をつくっていくことが大切だと思いました。イスラム教の人は食べることが楽しみだけでなくて食べものでも苦労しているので、いろんな人達が楽しくて食べたりしていける社会を作っていきたいと思いました。
日本の食を楽しみに観光客が来ることを初めて知った。あんなに楽しみにしてくれている人がいるなら、もっと選択肢の多い日本にしたいと思った。色々な国の人が好きになってくれる日本になるために、みんながいやすいところにしていったらいいと思う。これからどんどん国の人々の関わりが増えていい世界になるといいと思った。

９～１０月　地域課題解決への参画

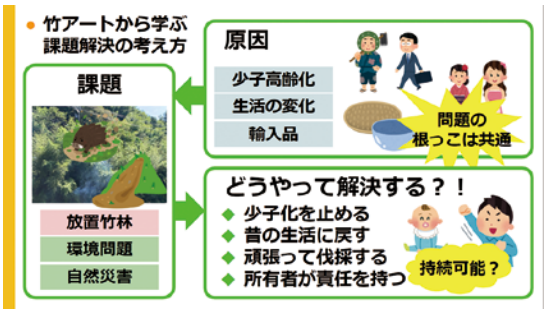
放置竹を利用したアート（パートナー　金沢市森林再生課および民間団体）

９月は金沢市森林再生課と複数の企業や団体が協働で地域課題の解決を目指す「サスティナアートプロジェクト」に参画した。市内では人の手が入らず放置された竹林が増加し、生態系の悪化や土砂崩れなどの自然災害、獣害などをもたらしている。プロジェクトでは放置竹をアート材料として活用し、作品の展示を啓発の機会とし、最後には炭にして地球に還元する。生徒はクラス別にアート作品と音声解説を制作し、市役所に展示した。

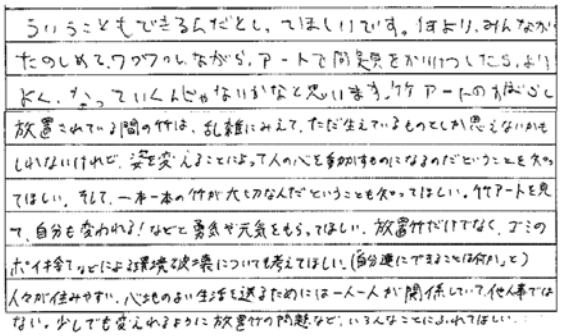
体験を通してSDGsの考え方と動き方を学ぶ

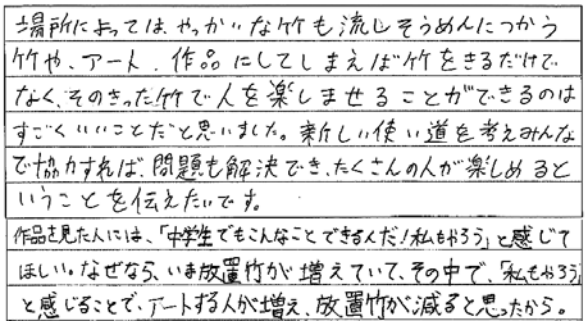
活動を振り返りながら、問題解決のプロセスや考え方を整理した。放置竹林の原因は少子高齢化や都市部への移住、プラスチックなどの新素材や輸入品の増加といった生活様式の変化である。少子化と生活様式の変化は、伝統産業の衰退から経済・社会保障に至るまで、現代社会における様々な問題の根っこであるが、原因そのものをなくすことはできるだろうか。また、中心となって取り組むのは竹林の所有者や、実害を被る人々であるべきだろうか。少子化を止め、生活様式を昔に戻し、重い竹を所有者の責任で伐採するなどの原因に注目したアプローチは難しく、仮に実現しても持続可能ではない。

竹アートは、「竹＝生活用品の材料」「成長が早くて困る」「竹林の持ち主が整備するべき」といった過去・困りごと・個人に注目するのではなく、竹と人間が共存する未来をどうしたら実現できるか、竹の良さを生かしてみんなが幸せになるにはどうしたらいいか、という発想から生まれた。このように過去より未来、困りごとよりも良さに注目し、当事者だけでなくみんなで取り組み、竹アートが最後は土に還るように環境とも調和させるのが、これからの問題解決に欠かせない考え方と動き方であり、SDGsと共通することを確認した。



振り返りには「新しい使い道を考えてみんなで協力すれば問題も解決でき、たくさんの人が楽しめる」などの記述が見られ、難しく複雑な問題にも力を合わせて包括的・多面的なアイデアを探る、SDGs的な考え方が身につき始めているようだった。また「中学生でもこんなことができる」といった参画への実感や自己有用感、「見た人に…を知ってほしい」「…と感じてほしい」など、社会に働きかけ、変容を促したいという意欲も見られた。


いうこともできるんだなと、てほしいです。ほかに、みんなが
たのしめて、ワクワクしながら、アートで問題をかいけつしたら、より
よく、なっていくんじゃないかなと思います。竹アートのおかげで
放置されている間の竹は、乱雑にみえて、ただ生えているものとしか思えないかも
しれないけれど、姿を変えることによって人の心を動かすものになるのだということを知っ
てほしい。そして、一本一本の竹が大切な人だということも知ってほしい。竹アートを見
て、自分もなれる！などと勇気や元気をもらってほしい。放置竹だけでなく、ゴミの
ポイ捨てなどによる環境破壊についても考えてほしい。（自分達にできることはなにか）と
人々が住みやすい、心ものびる生活を送るためには一人一人が関係していて他人事では
ない。少しでも変えれるように放置竹の問題など、いろんなことにふれてほしい。

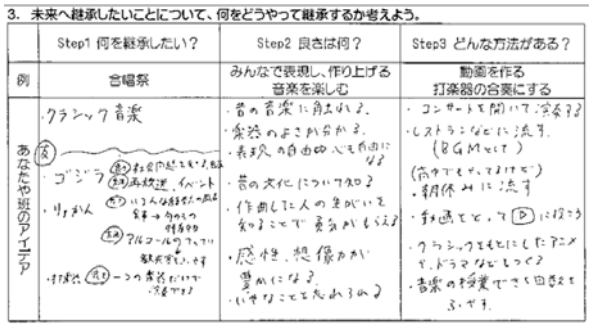

場所によっては、やっかいな竹も流しそうめんにつかう
竹や、アート、作品にしてしまえば竹をきるだけで
なく、そのきった竹で人を楽しませることができるのは
すごくいいことだと思いました。新しい使い道を考えみんな
で協力すれば、問題も解決でき、たくさんの人が楽しめると
いうことを伝えたいです。
作品を見た人には、「中学生でもこんなことできるんだ！私もやろう」と感じて
ほしい。なぜなら、いま放置竹が増えていて、その中で、「私もやろう」
と感じることで、アートする人が増え、放置竹が減ると思ったから。

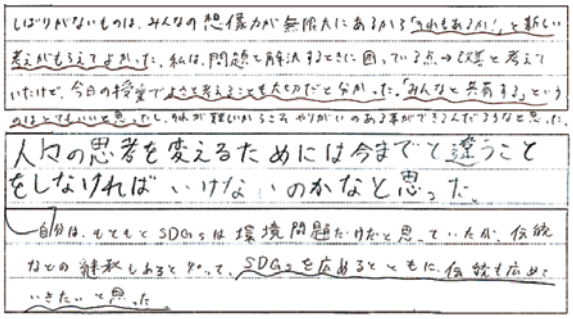
伝統の継承とSDGs

竹アートは既存のプロジェクトであり、生徒発の考えではない。体験を通して理解したSDGsの考え方を他分野に応用してアイデアを出すことで、学習の仕上げとした。

テーマは「伝統の継承」である。金沢は、金箔の使い途を工芸品から食品、化粧品へ広げたように、伝統に新しい価値観を加えながら発展してきた創造都市だ。過去にとらわれないSDGs的な未来志向が育まれてきた街とも言える。SDGsの考え方を知った上で金沢の歴史を学ぶと、自分たちは伝統を守るだけではなく革新する当事者だという意識が自然に芽生え、守りたいものや時代に合わせて変えたい部分、加えられる新しい価値などのアイ

デアを出し合うことができた。また、SDGs=環境ではないことも確認できた。





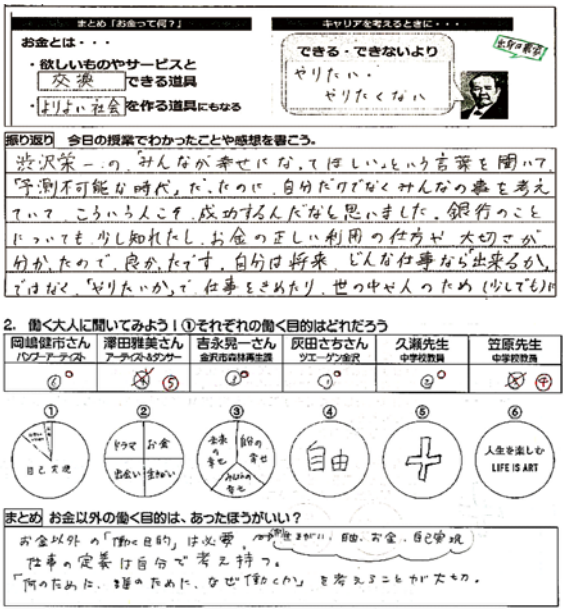
１１月～２月　何のために働きどう生きたいか、そのために今何をするか

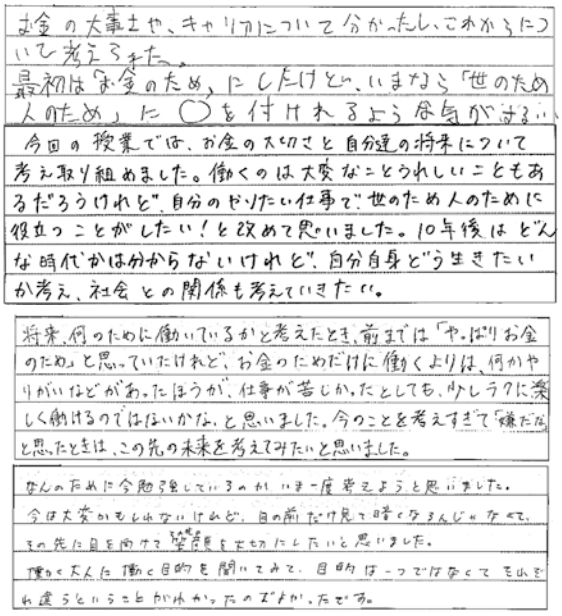
お金以外の働く目的は必要か（パートナー　三井住友信託銀行）

年度末の目標「自分自身の望ましい未来を描くことができる」に向けたキャリア学習の前半では、三井住友信託銀行が取り組むESD事業の一環として、SDGs教育メディア「SDGs.TV」を運営する株式会社TREEと銀行、本校の三者が協働して授業を開発した。

キャリア学習開始時、生徒が挙げた問いは「AIの発達でなくなる仕事は何か」「未来の社会はどうなるか」が最も多く、「仕事別の収入」「進学先の選び方」が続いた。「将来何のために働いていると思うか」という質問には「働きたいわけではないが、生活のためにはお金が必要だから」という回答が７割以上を占めた。

そこで最初の問いを「お金以外の働く目的は必要か」とし、経済活動と個人の幸福や持続可能な社会との関わりを探った。銀行員によるお金の話や、これまでに総合的な学習の時間でかかわった大人から再度仕事や人生への想いを聞く場などを経て、生徒は「働くことは社会に参画すること」であり「お金以外の働く目的を持つことがやりがいや幸福につながる」と気づき、「どう社会に貢献できるのか」を考えるようになった。

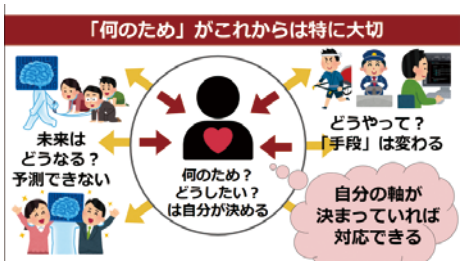




自分は何を大切に生きたいか（パートナー　映像制作会社TREE、伝統工芸作家と企業家）

人力車が自動車や飛行機に変わり、10年後には運転手の姿が消えるかもしれない。技術の進歩で手段が変わっても、移動するという目的や人の想いは変わらない。生徒は、徐々に社会の変化や収入の多寡といった外向きの問いだけでなく、自身の目的や望む未来は何かという内向きの問いの大切さに気づいていった。

そこで、次の問いを「自分は何を大切に生きたいか」とした。伝統工芸の世界で挑戦を続ける加賀友禅作家と、「100年後も家族で暮らしたい金沢を作る」ことを目指す起業家のインタビューを中心にしたオリジナルの映像教材をTREEが制作し、二人の生き方やメッセージをきっかけに、クラスメイトと対話しながら自身の価値観を深めた。



2. 自分やクラスメイトの「大切にしたいこと」を伝え合おう

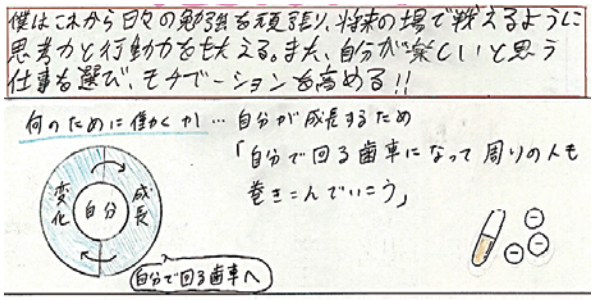
名前	1位	2位	3位	理由など
自分の答え	自由	プライベート	変化	自由…人に言われる人生じゃなくて、自分で決めた人生がいいから。プライベート…自分の時間を大切にしたいから。変化…色々な体験がしたいから。
さん	富	プライベート	その他	自分がそう思うから。
さん	富	自由	安定	自分の欲しい物をかくとするには富が必要。
さん	個人性	プライベート	安定	自分のやりたいことを好きな時間にやりたいから。

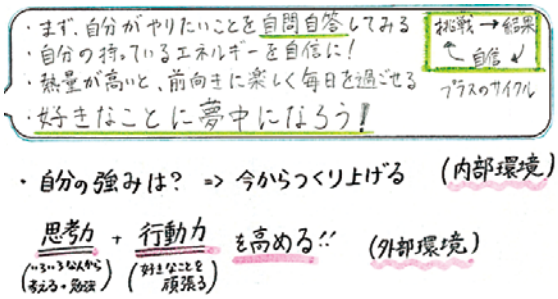
人に言われて、はいはい、ていっと自分の人生を変える人じゃなくて、しっかりと、自分で、試行を立てて、生きる人生がいいです。自分の時間を大切にして生きていきたいと思いました。色々な体験もしたいです。

これから先の未来は予測できないし、無くなっている仕事もたくさんあるかもしれない、というときに、「この仕事をやりたい！」と思うのも大切だけど、「こういうことを大切にして働きたい」という考えをもつことも大切だと思いました。

将来何のために働きたいか、そのために今何をするか（ゲスト　地域の大人10名）

描き始めた自分たちの未来をより具体的にするため、地域の大人から仕事の話や働く目的を聞き、対話する場を設けた。時代の変化を踏まえて、動画配信やeスポーツなど新しい職業に携わる方々にもご協力いただいた。生徒はそれぞれに「将来何のために働きたいか」という問いへの答えを出し、中学生の今できることを考えていた。その答えはこれから何度でも変わるだろうが、現時点における望ましい未来を自分で描き、逆算して行動することに意味があると考えている。





おわりに　「やりたい」で進めるSDGs

SDGsという大きな変革に触れる中で新しい考え方や動き方を身につけ、「自分で国や社会を変えられる」と思うようになり、実際に変化を起こす若者が増えることが私たちの願いであり、務めである。しかし人には慣れた環境で安心して力を発揮できる「コンフォートゾーン」という領域があり、大きな変化には抵抗を感じると言われている。それでも子供たちは生き抜くため、好むと好まざるとにかかわらず、変化に向き合わなければならないのだろうか。

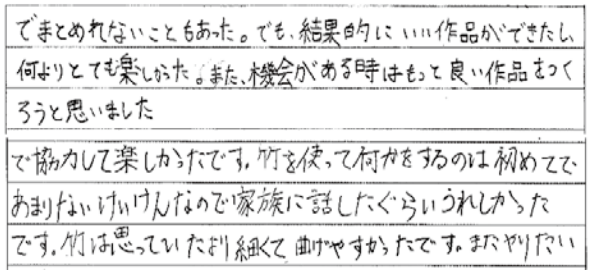
キャリア学習を振り返って、「『仕事＝やらなきゃいけないこと』だったけど、『仕事＝やりたいこと』に変わりました」と言った生徒がいた。人は正論や合理性によって変わるのではなく、「やりたい」「楽しそう」という感情がコンフォートゾーンの外に触れる機会を作り、やってみたら楽しかったという体験を繰り返すことで慣れ、結果的に変化できる。

楽しい体験は「伝えたい」という気持ちを生み、他者をも変えていく。竹アートを楽し

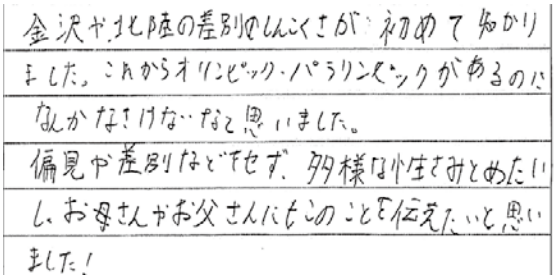
いと感じた子供たちが家族に話したことで、初めてSDGsに興味を持ったという保護者の声も多かった。子供が変われば大人が変わり、社会が変わる。

伝えたくなるのは楽しい体験だけではない。北陸は同性愛者に対する差別意識が全国的にも圧倒的に高いという調査データがあるが、それを知った生徒の多くが北陸の現状を「恥ずかしい」と感じ、振り返りで「家族にも伝えたい」と書いた。授業に協力してくださったLGBT活動家の方がそれを読んで、「この子たちが大人になる頃、いま自分たちが行っているような活動は不要になる」と言って嬉し涙を流されたことが忘れられない。子供たちの言葉にはどんな啓発活動よりも強い力があり、大きな可能性を秘めている。

変化の激しい時代を生き抜き未来を創る力とは、「見たいと望む変化に自分がなる」力である。SDGsを通してその力を育み、希望を創りたい。


でまとめれないこともあった。でも、結果的にいい作品ができたし、何よりとても楽しかった。また、機会がある時はもっと良い作品をつくろうと思いました

で協力して楽しかったです。竹を使って何かをするのは初めてであまりないけいけんなので家族に話したくらいうれしかったです。竹は思っていたより細くて曲げやすかったです。またやりたい


金沢や北陸の差別のしんこくさが初めて知りました。これからオリンピック・パラリンピックがあるのになんかなさけないなと思いました。

偏見や差別などをせず、多様な人生さみとめたいし、お母さんやお父さんにもこのことを伝えたいと思いました！

参考文献

佐藤真久・広石拓司（2020）『SDGs人材からソーシャル・プロジェクトの担い手へ』みくに出版

駒崎弘樹（2022）『政策起業家－「普通のあなた」が社会のルールを変える方法』筑摩書房